

「過去・現在・未来—その夢を語る」

- 開催日時：2005年7月11日（月）16:00～18:30
- 会場：大阪ヒルトンホテル
- 参加者：塚本邦彦（理事長）
山田幸平（元文芸学科教授 大学院名誉教授）
依田義右（教養課程教授）
大森一樹（映像学科教授）
松井桂三（デザイン学科教授）
織作峰子（写真学科助教授）
塚本英邦（教養課程講師）
窪田邦倫（読売新聞大阪本社事業局文化事業部部長 放送学科卒業生）
- 司会者：山縣 照（藝術研究所所長 文芸学科教授）

山縣 「大阪芸術大学グループ60周年記念の特別座談会」開催にあたり、理事長をはじめ、山田先生その他大勢の先生方にお越しいただきありがとうございます。この座談会は塚本学院グループ創立記念60周年を記念して、研究所が企画し、その内容を研究所の機関誌『藝術28号』誌上に掲載する予定でございます。

座談会の主題はご案内の書類に記載しましたとおり、『大阪芸術大学グループ60周年記念 過去・現在・未来—その夢を語る』ということであります。

この6月に、世界的な日本の企業の一つであるトヨタ自動車の社長になられた渡辺捷昭さんが、「現状に満足すれば衰退が始まる。健全な危機意識を維持し続けるDNAを提供したい」とある新聞で語っているのを読みました。

本日のテーマの中の「夢」というのは、現状に満足せず、常に危機意識を持ち続けたいという、この座談会を企画した側の意志の表明でもあります。健全な危機意識とは、また折々の「夢」のことでもありましょう。過去の夢、現在の夢、将来の夢を語ることを通し



て、世界的な企業としてのトヨタのモノづくりにも匹敵する、本校の人づくりの夢が明らかにできればと思います。

前置きはこれくらいにして、御出席の方々を私、司会者の左手手前から、テーブルの順番に簡単に紹介させていただきます。

まず理事長の塚本邦彦先生、次に芸術大学ができた頃から大学に関係していらしゃった山田幸平先生、比較的新しい先生として写真学科の織作峰子先生、次

の方も比較的新しく専任の先生になられた映画学科の大森一樹先生、次は右手に移りまして、同じく手前から芸大の中でも非常に長期滞在者という事を最近になって知りました教養課程・哲学の依田義右先生、本校の卒業生でもあり比較的新しく着任されたデザイン学科の松井桂三先生、放送学科卒業生で読売新聞大阪本社文化事業部長の窪田邦倫さん、それから最後になりましたが教養学科の講師の塚本英邦先生です。塚本先生は、同僚としても、また年齢的にも最も若い、新しい世代の代表です。

それでは「まず理事長から一言」と申し上げたいのですが、まずは最古参の、したがって昔の夢、芸大創立当時の「夢」をご存知の山田先生から一言お願いします。司会者側の希望としましては、創立当初にどういう夢があったのかということ、そして今はどういう風に思っているかということも含めてお願いします。

〈過去の夢〉

夢の想い出



山田 私は、創立当時の初代理事長で学長でもあった塚本英世先生と、およそ20年弱おつきあいました。塚本邦彦理事長ともだいたい20年というところで、昭和37年か38年頃から非常勤として短期大学で文芸学と演劇学を教えており、そういう時からだと思います。

ちょうどヨーロッパに4年ほど行っておりまして、昭和47年（1972年）だと思っておりますが帰って来てほっとしていたら、3月の終わり頃に大阪芸大の教授として来いというお話しでした。私はあまり就職に縁がない方なんですけど、ちょうどその月に限って3つ程ございまして（笑）、もう一つはある大学のロシア文学の教授、残りの一つは恩師から京都の美術館の学芸主任に

と話がきました。じーっと考えまして、魅力があるのは大阪芸大だと思ったんですが、お返事は4月間際になってもまだいたしませんでした。しかしちょうどその時、東京の小池藤五郎先生から電話があって、——これは初代の文芸学科の学科長である方で、南総里見八犬伝の校訂をなさった方ですね——「ぜひ早く着任してほしい」と言われ、それで決めたんですけれども。小池藤五郎先生が初代の学科長で、今の学科長も小池一夫先生ですから（笑）ちょうどね、僕はその事を非常におもしろいなと思っているんです。

もう一つ、私自身が学校ということでは非常に苦勞した事をそれに噛み合わせてお話したいと思います。昭和22年に戦争から帰って参りまして、大学を受験しないといけないんですけど、当時の生活では下宿なんてできないので、関西で探しておりました。しかしどこにも私の趣味である漫画とか、挿し絵付きの小説とか、映画とか、まあ一番気楽にやれるところがなかったんですね。そのとき阿倍野の本屋で本の一つを見つけまして、京大の美学の井島勉先生の『芸術の創造と歴史』という本を読んだとき、「ああここだったら自分の希望もかなえられるかな」と思い、受けたんです。学科試験はある程度通ったんですが、それが芸大と同じで口頭試問がありまして、「大学で何をやりたいんですか」と聞かれ、私が「映画の研究をやりたい」といいますと、「映画なんかありません。通そうと思っていましたが、映画だったら他へ行ってください」といわれました。他に行くところがありませんから、とっさに「西田哲学やります」と答えたら、「それなら大丈夫です」と言われて、入らせていただいたんです。

だから結局、哲学科ではあるんですけど、挿し絵ですね、いわゆるイラストレーション、絵画を含めて勉強できるのはそこだけだから入学して、いつのまにか時間がたったんですね。

この芸大に入って非常に良かったのは、私が昭和49年の頃に学科長になれと言われたとき、たしか48歳か49歳だったと思うんですが、創立時の方が皆さん錚々

たるメンバーだったんです。画家、建築家、デザイナー、あるいは写真家がいらっちゃって、色々教えていただきました。その中でも特に、昭和50年頃に映像学会というのがありまして、関学の小山義美教授という友だちに勧められて入ったら、ちょうどメンバーとして依田義賢先生が入っていらっちゃった。ここにおられる依田先生のお父様なんですけどね。同時に滝沢一先生、黒澤監督の映画を撮影したカメラ・マンの宮川一夫先生、そういう方たちとお会いしまして、その時に少年時代の夢が全部なくなってしまったんです。その体験がすごく大きかったですね。それでここまでやってこられたんだと思います。初期の先生方の名前を申しますと、染色の吉岡常雄先生からは『地中海のブルー』というのを教えていただきましたね。あるいは松井正先生からも絵の描き方を教えてもらいましたし、岩宮武二先生には敦煌の莫高窟で写真の助手も務めさせていただきました。非常に貴重な体験を得ることができたんですね。だから、私の半生から大阪芸大をスポッと落としますと、正直なところ、半分以上は何もないぐらいです。大阪芸大の40年弱の生活というのは、そういうものでした。

山縣 山田先生の御半生は大阪芸大と共にあったということでしょうか。私なんかもここにおられる依田先生のお父上の依田義賢さんやカメラマンの宮川一夫さんはお名前だけは存じ上げているんですけど、そういった方たちと…

山田 そうですね。同僚として過ごさせていただきましたが、その体験は他の大学ではなかったと思いますね。

山縣 では次に、不思議な付号ですが、大阪芸術大学グループの60周年の年に60歳を迎えられるという理事長をお願いします。

理事長 山田先生の場合は長いですし、今の大学院は山田先生のおかげで出来たようなものです。とてもお顔が広いわけですから。新しく大学院を設置する場合は④の先生が必要で、それが芸術系だったら何名と決



まっているんですけど、何も知りませんから山田先生に相談して、全部段取りをしてもらっているんですよ。

それから今もお話に出ましたが、創設者の塚本英世が全部つくったんです。私がつくったも

のは大学院と、4年制の通信教育と今年31年ぶりに出来ましたキャラクター造型学科ぐらいのものです。

山縣 依田先生はいかがでしょう。

哲学と芸術家

依田 私は哲学が専門なんですけど、硬い学問ですよ。それを大阪芸術大学で教えるとなった時に、いかに柔らかにするか、とても悩みました。ところが学生と対応するうちに、学生たちはアーティストなので、いわば哲学を、本人は気付いていないことが多いが、作品の中に一緒に作り込んでいるんじゃないかと、ふと思いました。といいますのもある時、ぼくが、ある哲学者のことばで、光が本物であるかどうかは、それが闇を通して来たかどうかで決まる云々というのを、学生諸君に話しました。もちろんこの場合の光とは、光そのものたる神の靈的光、ロゴスの光のことであって、闇は、第一の被造物としてのそれ、あるいは、肉としてのそれであり、神の光であれば、肉たる闇を圧倒して、これに打ち勝ち、われわれの魂に達するはずであるという意味です。ところが、「私もかねてからそう思っていました。」と複数の学生から反応がありました。いまにして思えば、私も若気の至りで恥ずかしいのですが、「これは物質的光のことじゃないよ。」とやや侮っていいますと、その内の一人の学生が、「分かっています。」といってぼくに話した内容の深さに驚きました。物質的光について同じように考えていると同時にアナログ的に彼らの構想力は深まって高貴な光へともう移行していたのです。その時ぼくは、「アーティ

ストに対しては、それほど神経質になって、分かりやすくする必要はないかもしれない。」と思うに至りました。その後、テレビを見ていたら、100歳をこえて、もうほとんど作品を作る体力がなくなりつつある芸術家が、詩人や、哲学者みたいなことを話してるのをきいて、「これだな。」と思いました。アーティストは制作活動をやめたら、もともと作品の中に溶け込んでいた詩的なもの、哲学的なものが、葉脈が浮き出るように露出するので、詩人や哲学者のように見えても不思議ではないのだな、と。

もっともこれには傍証があります。古代ギリシアの哲学者には、元画家であったという人がかなりいます。中には画家でもあるという哲学者もいます。プラトンは若い頃、悲劇作家・脚本家になりたくて、アテナイで開催された脚本コンクールに参加するために、脚本を小脇に抱えて急いでいると、人集りができているので何だろうと覗くと、ソクラテスが青年たちに取り囲まれて、ど真ん中で、哲学の話をしているところでした。プラトンはソクラテスの話を聴いているうち、感動して、せっかく苦勞して仕上げた脚本をその場で焼き捨てたと伝えられています。でも、プラトンは脚本家としても生きていけたと思います。事実、プラトンの全作品は、師ソクラテスが主なる登場人物である脚本形式（対話形式）で貫かれています。

そのように、いずれにせよぼくは、芸術家は、まあ気付いている人も中にはいるでしょうが、ある意味で、哲学者や詩人でもあるのだと割り切って考えるようになり、それでほっとして哲学の授業が随分教えやすくなりました（笑）。

山縣 先生は30年近くこの大学にいらっしゃるわけですが、その間、理事長がおっしゃったように、いろいろ新しい学科ができたりしています。そうした変遷の中で、先生のご専門の哲学と学生さんの関係もさることながら、芸大そのものの大学像の変遷といったところで何かお感じになるような事はございますか。

依田 先ほど理事長がおっしゃったように、どんどん



学科が造られ、学科が増えることで、やはり活性化しますよね。よく伝統とか伝承とかいいますけれど、判を押すようにただ単に同じことを繰り返し続けているだけでは、だんだん目減りして、じり貧になっていきます。シルクスクリーンでも目減りしますよね。グラフでいえば、たとえわずかであっても、右肩下がりで垂れてきますよね。その垂れた線があるときぐっと持ち上げる人が必要です。大阪芸術大学でそれができているということは、幸せなことです。

学生として経験した芸大

山縣 今までは教官側の立場での話題が進んできました。今度はかつて学生であり、今は先生でもいらっしゃる松井先生にお話を伺いたいのですが。

松井 私は2期生なんです。美術学科とデザイン学科の2つしかない時代です。その当時は芸術系の大学が少なく、東京芸大、武蔵美、多摩美、日大、大阪芸大、金沢美術工芸大学、京都美大、京都工芸繊維大ぐらいしかありませんでした。

私はたまたま広島で育ったので、（もともと）広島大学に行こうと思っていました。だけど、将来どうしようかと悩み、おふくろに「アーティストになる」と言ったら「食えないからやめろ」と。それもあって、「デザインなら食えるかな」という感覚で（笑）。実は非常にファッションが好きだったので、ファッションデザインがしたかったんです。ところがいろいろ調べますと、行こうとした学校の学生比率が、女性が70%、男性が30%ぐらいだったので「これは俺が行く学校じゃ

ない」と思いました。結局、広島からあまり遠くに行かしてもらえなかったのと、おふくろがずっと大阪に住んでいて土地勘を持っていたものですから、大阪（芸術大学）にたまたまに来る事になりました。それが僕の今までの経歴になっているんです。

私が入学した時、非常にいい先生たちがいらしたんです。美術学科もそうですし、デザイン学科も中村真さん、早川良雄さんも後からいらしたのかな。その中でも先程の山田先生のお話に登場した岩宮先生の言葉を今でも一番覚えています。京都に写真を撮りに行く授業があり、——今はデザイン学科で外にロケという授業はあまりないのですが、その頃はどンドン外に出て、あるいはシルクスクリーンを刷ったり、エッチングを彫ったり、アートの系統の実技もかなりあったんですね——京都の先斗町あたりで撮影して帰り、いわゆる映写会でいよいよ学生が批評される訳です。そこで、今も覚えているのですが、私だけが誉められたんです。「君は立体を平面化すること、平面を立体化することに長けている」と言われまして、それが非常にうれしかった。今、教師を始めて、やはり誉めてあげるという事がどれだけ学生にとって重要かという事を思います。

その頃の話ですが、その後、私がいる時にできたのが陶芸と写真、学科だったのかどうか覚えていませんが、その2つが増えただけで、そんな時代だったのです。当時のデザイナーの登竜門である日本宣伝美術家協会というグラフィックデザイナーの会が主催する、年に一度のコンペがありましたが、当時は教えに来ていただいた先生の中で、そこで奨励賞をぼんぼんぼんと3年連続して獲る先生がいるんです。「すごいな。そういう先生に師事しないといけないな」と、18歳や19歳の頃だから思うんですよね。そんな先生を見て勉強しようと思ったんです。その後はデザイナーになるのですから、「師匠がいてもしょうがない」と思ひまして、自分なりの情報でアイデアを出し、良い姿勢でデザインをやっつけていかなきゃいけない、と考えていました。

その当時の夢は「世界」だと思っていましたね。

山縣 それは学生としての松井先生の夢と、当時のスタッフ、学校の夢とがうまく重なっていたということですね。

松井 そうですね。日本のデザイン情報があまり海外に出ない、あるいは入ってくるのもニューヨークの情報しかなかった時代ですが、確かに世界で認められた先生方がいらっしゃいました。そういう意味で私はよかったですと思っています。

山縣 ありがとうございます。それでは次に同じ卒業生として、そして実社会でご活躍なさっているお一人として窪田さん、いかがでしょうか。

多様な学科、学科間の交流



窪田 この大学に入った理由は極めて単純明快です。私はラジオドラマをつくりたかったんです。テレビと違い、耳で聞いていろんな想像を膨らませるラジオドラマに興味をおぼえ、その世界で将来仕事をしてみたいと

思っていました。当時、放送学科のある大学は、日大の芸術学部と大阪芸大の2校しか全国になかったんです。私は出身が鳥取なので、東京はほとんど視野に入れてませんから、迷うことなく大阪芸大の放送学科へ進みました。そこに行けば自分の夢が必ずかなえられるという思いからです。

私自身が思う芸術の領域というのは、——これは私の私見かもしれませんが——、限りなく広いと思うんです。ただ単に芸大という名前から考えると、なんとなくデザイン、美術、音楽が中心になっているような気がしますけど、芸術の領域には従来の固定観念にとらわれない、様々な分野が全て入ってくると思うんです。そういう点からいくと、大阪芸大には設立時から夢をつかませたいという思いがあり、学科のネーミ

ングなどに現れているんじゃないかと思いますね。先見性と何かにチャレンジしていこうという精神が最初からあって、それがずっと今も培われ、いろんな形に発展していったと思うのです。

現に放送学科も我々が入った時は、依田義賢先生に映画を教えてもらい、矢部先生に放送、千代間先生にラジオ、もう亡くなられた津山先生に演劇の事を習い、放送の中に色々なものが凝縮されていました。それが一つずつ大きな積み重ねとなり、広がり、舞台芸術になったり、いろんな学科として独立していった。やはり大阪芸大というのはすばらしい学校、今後も更に前に前に向かっていく学校だと思いますね。私が仕事をするマスコミや芸術の世界をはじめ、どの世界でもそうなのでしょうけど、これで終わりとか、完成ということはないと思うのです。私の今があるのも大阪芸大でそういう精神を培ったからだだと思いますし、私は良い大学を卒業できて本当に良かったと思っています。

〈現在の夢〉

山縣 ありがとうございます。今までのところは創立の頃からいらした先生方、あるいはその頃に学生をされていて、今は様々な仕事にたずさわっている方々のお話で、夢と学校が重なった話ばかりだったのですが、夢というのは不平や不満からも生まれるものですか。こうあって欲しいという想いが「夢」を生み育てることがあると思うのですが。最近来られた織作先生いかがでしょうか。外からいらっしゃって、先生ご自身の期待、または夢、あるいは今の大阪芸術大学に対する不平や不満などはないでしょうか。

クロス・ファンクション

あるいはコラボレーション

織作 新参者なのですが、大学に参りまして私は4年生のゼミを担当させていただいております。4年

生というと、就職など、卒業後の将来を決めなくてはいけない時期に入っています。写真学科の学生は、比較的技術的な事はしっかり身に付いている学生が多いですから、授業を受けていない時は、ラボ（現像所）に行っておアルバイトをしたり、結婚式のスナップを撮って小銭を稼いだりしている学生がいて、いくらか就職を意識している学生もいます。そういう学生に関してはいいのですが、今まで親に授業料払ってもらって、どこか親の庇護の元に生きていながら芸術の勉強している訳ですから、これから社会人になるという意識があまりない。もちろん（そうした意識の）ない良さ、ない悪さがあると思うのですが、こんなにのん気でもいいのかなと思う反面、まあ芸術家なんだから食べられないのも一つだろうと思う気もします。社会に出ていって自分が陽の目をみる時期を楽しみにするのも一つだと思うのですが、そんな時に一番大切なのは人間性です。どんな世界で生きていても、食べられても食べられなくても、やはりその人の人間性というのはすごく大切だと思うんです。そういう感覚で学生と接していると、守られてきていると感じる学生がかなり多いんですね。そんな学生がこれから社会に出て、荒波を乗り越えていけるのだろうか。挨拶一つできない学生が大勢いたりするんですよ。だから私は生徒に「生きていくうえでの生活の知恵として、うまく世の中を渡っていけるような生き方を、少しは身につけてく方が得よ」という話をしています。親心になっちゃうんですね。今までは親に高い授業料を払ってもらっていたのが、これからは自分でやっていかないとはいけない訳だから。これから社会で色々な人と出会っていく中で自分がどういう態度をとれば得か損かという事ぐらいは教えていこうと思います。

例えば写真の場合だと、今はデジタルの技術は重要だから、「(就職試験の)面接で『デジタルの技術はありますか?』と質問されたら、なくてもありますと言いなさい(笑)。その瞬間から勉強すればいいんだから。とにかく第一印象が大事だから、なんでも『できま

す!』『やります!』『やる意欲だけは誰にも負けません!』と明るく言った方がいいわよ」と。勉強だけでなく、うまく人生を生きていくテクニックみたいなものを私なりに教えてあげたいと思いながら学生と接しています。卒業してからいろんな壁にぶつかるのが目に見えているんですよ。実際に私もそうだったので、その時にどうやって生き抜いてきたかということ、大学生たちと接する中で少しずつ教えてあげるのが先生の使命ではないかと思うんです。

私はまだ2年目ですが、写真だけ撮って（撮らせて）いるんじゃないんです。先程、依田先生が「写真家は詩が作れる」とおっしゃいましたが、逆に詩が作れなければ写真家じゃないのです。詩を書くような気持ちで写真を撮らないといけません。だから文書も書かせようと思うのです。フォトエッセイという言葉があるぐらいで、写真は必ず言葉と抱合せなんです。

後は大学がだんだん大きくなり、いろんな学科が出来ました、その学科同士のクロスファンクションというか、——一般社会でもそうですよね——他分野と一緒にものをつくる事で何か新しい発見がある。これからはいろんな分野の人たちが大いにクロスする事が大事で、それが出来るのが大阪芸大だと思うんです。そこから、大きく輪を広げていく事が一つのポイントじゃないかと思えます。私も写真を撮りながらテレビにも出ていますし、いろんな分野の人たちとクロスしている事によって自分自身、成長出来ている実感があります。まさにこの大学だったらそういう事が出来ると思いますから、そこを踏まえて夢に向かって生きていきたいなと思えます。

山縣 大森先生。ここ大阪芸大では非常に新しい先生なんです、いかがですか？

大和川の南に文化？

大森 今年から専任で来たのですが、大阪芸大はずっとそばにあったような気のする大学です。と申します



のが、僕は昭和27年生まれです、これ（配布資料「大阪芸術大学のあゆみ」※注：座談会の最後に掲載）で言うと、3～4行目にあたります。生まれた所が大阪市東住吉区田辺本町7丁目という所で、ここに記載されて

いる平野や美章園、矢田というのが非常に馴染み深い場所なのです。（自宅の）最寄りの駅は南大阪線の針中野でしたから（笑）。本部が矢田に移転された2年後に、針中野を離れて今住んでいる兵庫県の芦屋に越し、以来ずっとそこで住んでいます。こういっちゃなんですが、東住吉区より芦屋の方が芸術、文化の香りが確かに高かったような気がするんですが（笑）。そこで中学、高校時代を過ごして、映画と出会います。

その次に（記憶に）出てくるのが、1971年のこと。大阪芸術大学芸術学部映像学科（映像計画学科）が出来たんですね。それを覚えています。僕は1970年に高校を卒業し、浪人しておりました。父が医者だったので、医学部にいけというんですが、かなり高い壁だと思っていました。そんな時に大阪芸術大学の映像学科ができました。高校の時から8ミリ映画なんかをやっていたものから「こんな近くに映画を勉強できるところが出来たんだ」と思って親に言いましたら、「とんでもない！大学で映画を学ぶなんて、何を考えている！だいたい大阪芸術大学の芸術学部の映像学科なんてこの先どっちへ行くかわからんだろう」と言われました。父母は東住吉区に長く住んでおりましたので、大和川の南に文化があるとは思っていません（笑）。そういう事もあって一笑にふされ、2年後やっこのことで医学部に入学したんですが。その後、いろいろ経まして映画監督になりました。

映画監督になって、1980年代頃からでしょうか、スタッフ、助監督、プロデューサーの中に大阪芸大の映像学科を出たという人がぼろぼろと出始めました。10年目ですね。「ああ、やっぱり出て来るんだ」と思って

いるうちに、ここ数年、急激に大阪芸大出身の映画監督が出てきました。今や、東京を中心とした映画業界の中でも大阪芸術大学出身の方が非常に多くなってきて、東の日本映画学校、西の大阪芸大といわれるぐらい、業界のスタッフの中に増えました。そういう意味で、「映像学科は20年はかかるんだな」としみじみ感じましたね。

その次に出て来ますのが1999年です。長女が大阪芸大にいきたいと言い出しましてね。「おおそうか。大阪芸大だったら入れるじゃないか」と思ったんですが、塾の先生に聞くと「とんでもない。大阪芸大はなかなか入れません」と言われてびっくりした経験があります。当時、京都東映の仕事をしていて、中島貞夫監督が教授をされているので、京都撮影所でお会いした時「娘が芸大の映像学科へ入りたいて言っているんですが」と言うと「大森君の娘だったら入れるだろう」という訳のわからない言葉をいただきました（笑）。確かに合格したんですけど、アメリカの大学に行きたいと言い出しまして、「大阪芸大に行ってくれたらいいのに。中島監督にも言ったのに」と思ったものですが、無事に今年、アメリカの大学を卒業いたしました。

山縣 何なさっているんですか？

大森 一応ねえ、映像をやるって聞いていたんですけど、卒業式へ行ったら全然違う彫金かなんかをやっていました（笑）。おまけにアメリカ・テキサス州のノーステキサス大学なんですけど、そこで彫金を教えてもらった先生が、3ヶ月日本の京都で勉強してきたアメリカ人。それだったら京都の芸大へ行っていいじゃないかと思ったんですが。娘の代わりに、この大学へ来たというわけではないんですけど（笑）。

2003年からこちらで非常勤で来るようになり、今でも近鉄南大阪線の針中野を通過する時、本当になんだか目頭が熱くなるような感傷があり、「40年かけて、戻ってきたな」と感じています。

ここ数年、全国の芸術系他の大学で、映画の学科がどんどん出来ているんですが、さっきも言いましたよ

うに、大阪芸大が10年、20年、30年を経てどんどん大学から映画界に人材を送れるようになった。それだけの時間がかかるという事です。東京芸大の大学院にも出来ますけど、それなりになるのに10年20年かかると思うと、一番良い時期に大阪芸大でやらせてもらっているんじゃないかと、本当に幸福に思っています。この30数年、中島貞夫先生、先ほどからお話に出ている宮川一夫先生、依田義賢先生、滝沢一先生と、代々の、映画にかかわる我々の大先輩が一生懸命やってこられました。施設的な事もそうですが、撮影所まで持っている大学は、まあありません。撮影所なんてものは、これからの大学が建てるとしても、とても建たないと思います。そんな事を考えると、改めて、大阪芸大の一番良い時期に映画を担当させていただいていると思っております。

〈未来の夢〉

山縣 個人的には非常に幸せだという事ですね（笑）。では一番お若く、さまざまな意味で大阪芸術大学の将来を担ってらっしゃる塚本英邦先生は、いかがでしょうか。

異文化体験・国際的コラボレーション



塚本英邦 私は去年から教養課程で、社会学と情報処理分野でパソコンの実習を担当させてもらっています。教養課程主任の先生の前で言うのもなんですが、芸大の中の教養の役割というのは、——私個人の考えなのですが——、普通の大学の経済や社会学という一般教養とは違うのではないかと思うのです。芸大であればそれぞれの学科に行けば、そこでコアな能力を学ぶ。教養課程だけが一般教養、大学生が持っていなければなら

ない全般的な知識を学ぶ場所ですが、他の大学の社会学部の講義以上のものをしようと思ひ、授業を進めています。出張などで海外へも行かしてもらおうのですが…。ニュースを観ていますと、日本人の多くが海外に行っているイメージがあるんですが、実はあまり行っていない学生も多いんですね。芸術家、アーティスト、クリエイター言い方はたくさんありますが、芸大の学生にはもっと外をみて欲しいという思いがあります。海外旅行に行けば、そこの文化に対して強烈に、例えば違和感であるとか、気持ちよさなど、いろいろ感じると思うのです。そんなふうに分持っている世界と違うものにたくさんかかわって欲しいという気持ちに加え、ヨーロッパ系、アジア系の学生も芸大に増えれば、芸大の中で色んな文化のコラボレーションが起こるし、学科間のコラボレーションも活性化するんじゃないかと思うんです。

僕は1年前まで芸大の歴史はほとんど知らなかったんですけど、今こうして発展してきて、今後も発展を続け、アートと名のつく分野全てを包容していける大学になったらいいと思います。

山縣 ありがとうございます。発言が一巡したところで私個人の事を申し上げれば、大阪芸術大学に伺ってお世話になってから、今年で5年目か6年目になると思います。着任する時にも様々な夢を持っていて、今もまた夢を持ち続けているわけですが、60年ということで考えますと、今、私たちはどこかで守りに入っている所もあるのではないかと思います。これからはそうした「守り」と同時に「攻め」に向かわなくてはいけないというのが私の感想です。先程、織作先生や塚本英邦先生がおっしゃったように、これから先の事を考えれば、さまざまなクロスファンクション、あるいはカルチャーコラボレーションという形が必要かなと思います。創成期にはいろんな学科を創っていくという夢があった訳ですが、今は各学科共どこかで自分の学科を守らないといけないというような面もあるように思います。そうになってしまうのは危険です。そのと

き、先程申しましたトヨタの新しい社長の言葉の通り「常に危機意識を持って前向きに行かなければいけない」という考えが必要になるかと思います。

ここからは、今までの自己紹介を兼ねたような先生方の発言を踏まえて、どなたからでも結構ですので自由にご発言ください。

〈夢のコラボレーション・ コラボレーションの夢〉

依田 先程から織作先生、山縣先生、塚本英邦先生もおっしゃっていましたが、まったく私も同感です。他の中小の芸術大学ですと、それぞれ苦心して何か売りを創っているんですね。一つの都市の中にいくつか中小の芸術系大学があると、それぞれの売りを持ち寄って何か企画していくところがあり、涙ぐましい努力をしなければなりませんね。そこへいくと我々の大学は一ヶ所で全部売りになるものが揃っています。それどころか他の大学にないような学科も全部揃っているんです。だから先程織作先生、山縣先生、塚本英邦先生がおっしゃったように、そうになったら今度は、内部で核融合というようなものを起こしていかないといけない。それをどのようにすれば良いかということですね。しかし「言うは易し、行うは難し」ですから。何かうまい方法で実現できればいいですね。

山縣 山田先生、最初の頃、新しい学科が次々できる段階では、依田先生がおっしゃった核融合というか、様々な学科間の交流というのは…

創生期のコラボレーション

山田 そうですね。織作先生のお話を聞いて、おたく族的な学生を苦心して教えたことを、反省を含めて思い出しているんですが。大阪芸大では、文芸学科といっても創作があるんです。それが最初から苦心しまして、創作といっても最初からすぐに創作の先生が呼べ

るわけじゃないので。小松左京、小川國夫、眉村卓、それから文芸評論の川村二郎、こういった専門の方をお呼びできるようになったのはずっと後です。例えば私は美学出身ですから、美学でいうと芸術学と芸術史、文芸学と文学史、もう一つ学生の要望がありまして、演劇学と演劇史で、これは芸能史も含めます。それから私と同じく映画の好きな学生が多いですから、映像学と映像史、あるいは映画学と映像史という縦の丸太ん棒のようなものをつくりました。それが非常に膨らんできた。

短大で私が教えていたときは、岩崎真澄という先生、それから画家の鍋井克之先生が学部長でいらっしたんです。今から思いますと、大阪芸大の一つの面白さは、学部長がいないこと。それがあある意味では孤立した学科が膨らむ一つの要因でもあったのです。結局、私は今の4つの線をつくったのですが、例えば文学史だったら私はロシア文学系だとか、フランス文学系だとか、いろいろ細かくやっっていくわけです。そのうち、4つの線の中で美学・芸術学は、後に大学院にとられてしまうんですね。映像学と映像史、映画学と映像史、これはね、依田（義賢）先生とか滝沢先生などが文章の研究を進めていましたから、文芸学科と共同でやろうということでした。映像学会があり、学生の交流もできて、わりとうまく共同できました。演劇学と芸能史の問題も、一部は大学院、あるいは舞台芸術学科や放送学科との連携がうまくいきました。つまり、まとめていくというか、解体したといたらいいのか、長い間にいろんなことがありました。

個人的に反省しますと、織作先生がおっしゃったように、おたく族的な学生を引きあげるのには失敗したなと思いますね。京都大学は、東大などと違って私も含めて、非常におたく族が多いんですよ（笑）。研究はするけれども、交渉はしない人たちが多くて。旧制の頃です。芸大では私が調べて、ノートにとって、それから教えるのですが、学生が聞いているだけでノートをとらないんです。どうしたらいいかなと思っていて、

あるとき気付いたんですね。「発想」だけでしばらくやっっていこうと。（事前に）調べずに、「私はこういう風に思っている」という形を主体にして講義しますと、後でコミュニケーションがうまくいくんですね。そういう個人的な体験がありました。

今、大森先生が大阪芸大を志望された話がありましたが、私もし昭和27年生まれ、大森先生の年齢でしたら、確実に受けていたと思います。入学ができたかどうかわかりませんが（笑）。

理事長 大学の値打ちはどんな先生を揃えているか、これが一番大事なところなんですね。今、先生方のお話を聞いていますと懐かしい、すごい先生がいっぱいおられたというお話でした。しかし、よく考えると今はその時代を超えていますね。

理論系の先生は学閥がございまして、山田先生などにお願ひしますと、パッと揃えてくださるんですけど、実際に描いたり、フィルムを回したりという実技に関しての人材は難しいんですね。一時期、学校が腰がひけていて、大森先生のところに行っても所詮門前払いだろうと思ったり、松井先生のような屈指のデザイナーに持ちかけてもそりゃだめだろうと。実際、神戸の大学や、電通大におられたりする方ですから。織作先生も美しく写真もよく、昔から欲しいな、欲しいなと思っていたんですが、やっぱり腰が引けていました。

しかし、カリキュラムの充実の為にはオファーしなければいけないという思いがふつふつと湧いてきました。小池一夫さんは私が辛抱できなくて自分で交渉しました。直接交渉に行くんですね。そういうことで、今の大阪芸大には、時代を凌駕するすごい人たちが、実際の社会で活躍されちる方が揃っています。そういう点では自慢できると思うんですけど、これからはコラボレーションのことでですね。各学科で一緒にいきましょうということは非常に難しいですね。

山縣 司会者は司会者として必要なこと意外はしゃべってはならないと思っていたのですが、初期の段階では各学科の先生方がわりあい協力しやすかったと



思うんですね。でも学科という形が出来てしまったがために、各学科が守りに入っているところがあって、学科間の交流が弱くなっているようにも思われるのですが。

コラボレーションの成功例

「探偵オブマイハート」

理事長 先程、記者会見していたのですが（大阪芸術大学・KBS京都・tvk・サンテレビ 産学協同ドラマ『探偵オブマイハート』制作記者発表※編集部注）、テレビ局のKBS京都と、サンテレビ、テレビ神奈川、千葉テレビ、三重テレビといったところで、大阪芸大がドラマを創るんです。脚本から監督など全部を創って、それを放送する。そういう企画を始めて今年3年目になります。映像と俳優は舞台芸術学科の学生たち使って、主題歌と音楽は音楽学科が作曲、演奏学科が演奏するというものです。

大森 ロケ地が芸大なんですよ。

理事長 そうなんです。

山縣 映像というものは、それそのものが、総合芸術的なところがありますからね。

理事長 これが（コラボレーションとして）今までで一番成功している例でしょうね。先生方も専門のすごい先生たちでばかりです。こういうものは学生がいくらやろうといってもできないので、先生方から声をかけていただくのが必要だと思いますが、しかしはたしてそうしていくのが良いのか悪いのかですね。

大森 それはいいですよ、絶対に。理事長は、いろいろ名前のある方呼んで来て、大学をやってこれたとおっしゃっています。僕もいくつかの大学で教師をやってきて感じているんですが、引っぱってくるというのは、言ってみれば簡単なことなんです。ただ、引っぱってこられた者としては、大学の中でうまく使

っていたかどうかが一番大事なのです。僕はこれまでの大学で、講義ばかりさせられていて、だんだん嫌になってきました。ここに来てまだ1年目ですから、2、3年でへそを曲げるかもしれないですが、とりあえず今のところは非常にやりやすい。それは先程から話にあがっている、学科の伝統でしょうか、自由にやらせてもらっています。

自分が持っているもの、現場で学んだものを学生に直接教えることができるのは、僕らの場合、講義ではなく、やはり実習など、実践的な授業です。ここに来て初めて、こういう形だったら教えられると実感しました。ですから、人を連れてくるのは非常に簡単なのですが、連れてきた人をうまく大学の中で使っているところに、大阪芸大はたいしたものと感じています。ご存じだとは思いますが、関西にはこれから、いろんな大学に、僕も知ってる映画監督が来ますが楽しみでもある半面、うまくいくかなと少し心配もあります。映画監督というだけで来てもらっても、自由に映画を教えることがどういうことか理解されていないと続かないのじゃないかと。その点、大阪芸大では、うまく使ってきた伝統があると思います。

山縣 松井先生、うまく使われていますか？

社会とのコラボレーション



松井 使われていますね（笑）。私の場合は今まで教えるということがなかったものから、本当に教えられるだろうかと思っていたんです。ところがやってみて、私にとっても合っているなどという意識を持ちました。私

の場合は考え方として、古代人は、ある地域の限られた情報の中で、現代人がビックリするほどのクリエイティブをしています。それは土器や青銅器に付いた空想上の動物などに見られます。その想像性に富んだク

リエイティブ、それらを見習って、現代の我々は、古代人に笑われないクリエイティブをしなければならない、と考えています。これはテーマの「夢」に通じる話ですが、私は未来人に残していくものを創りたいと思っているんですね。我々の世界は、紙一枚で明日は捨てられるようなものなんだけど、そうじゃなくて、ちゃんと残していけるものが創りたい。そういう精神性とか、考え方みたいなものを学生がとらえてくれたらいいなと思います。確かに実技もきちんと教えていますけど、そういう意味での交流を持つと思うんですし、先ほどの学科間の交流というのは、私はわりとやっているつもりなんです。というのは自分から出ていかないと来てもらえないんですよ。私は新しい人間なので、バスに乗っても全然知らない先生ばかりなんです。だから、自分から舞台芸術学科や、アート関係の学科に行ったりして、何人かの先生や学生と仲良くしています。

これは小さなことなんですけど、私の仕事のグラフィックデザインから広がって行って、クライアントの一つである薬品メーカーが、本町にチャイニーズレストランをつくることになったんです。チャイニーズレストランは神戸や大阪など、どこにでもたくさんあるので、どんな仕掛けをしようかと考えました。やっぱりコラボレーションかなと思ったのです。香港に『ヨウゲツ』という、香港の有名人や知識人の中で人気の、いわゆる点心、飲茶のレストランがあるので、それを持ってこようと香港に行き、話をつけてきたんですよ。本町の店には1階・2階・3階で約120席あるので、1階は香港スタイルの飲茶、2階はチャイニーズアールデコ、3階はオールド・チャイニーズといったイメージで仕上げました。そして、中国に行き、100年前のアンティークの家具を買い付けてきました。家具だけでチャイニーズレストランをつくらうと思って。だから各テーブル、イスが全部デザイン違うんですよ。私はグラフィックデザイナーであって、インテリアデザイナーではないので、白いスペースで、何ができるのか

なところなんです。そのとき、その白い壁に大学院・日本画の助手の中川さんに水墨画を描いてもらいました。また、芸大の大学院生のアート作品を買って、飾ったんですよ。学生にしてみれば、初めて自分の絵を買ってもらえるわけですからすごく喜びますよね。大学院の制作現場へ行って作品を選び、学生と一緒に店に10点ほど運んで、実際に置いてみて、どれが合うのか吟味して、その中から3点選んで買い上げました。その際、いきなり私が大学院の絵画へ行っても誰だか知らないと思い、大学院の先生に声をかけました。そういう小さなことがコラボレーションになっていくんじゃないかと思っています。

大学間コラボレーション

松井 私の今の大学院生でニューヨークからの留学生がいて、木版画やシルク、和紙作りなどいろんなものをやりながら、アート本を制作したいと言うのですが、大阪芸大ではたまたま和紙を作る道具がありません。「京都精華大学で一つの学科で和紙を作っているからそこへ行きたい」と言うので、向こうの黒崎先生に依頼書を書きました。今は土曜日1回だけそちらへ通っています。

山縣 それは版画の先生ですよ。

松井 そうです。素材になる和紙も作ってらっしゃるんですね。その学生は土曜日に行って和紙を作りそれを持ち帰って、芸大で作品を作っています。和紙を作ろうと思うと、今の時点では大阪芸大ではできないので、和紙の産地になるのですが、遠いし、彼女は滞在期間に限りがあるのでそんなことをやっています。ともかく、コラボレーションというのは学内外で非常に重要だと私は感じています。

それから、大学のイメージについて。我々が企業に対して行う仕事と同じで、大学としてのブランディングをきちんと考えた企画で、ビジュアルコミュニケーションをやっていく必要があると思います。芸大は15

学科もあるので、外から見るとイメージが複雑なんです。学科によってもバラバラだし、ある学科では良く見えて、ある学科では悪く見えることもあると思うんです。そうではなく、グループ、あるいは大学全体としてどう見えているのかということですね。ビジュアルコミュニケーションとして、きちんと良い状態でイメージが保たれているのかどうかということです。

また、先ほどから大森先生やみなさんがおっしゃっていた通り、良い先生がたくさんおられる中で、そういう方たちが何をやって、何を学生に見せているかということが非常に重要だと思います。教えるだけというのは難しく、やっていることを学生は見て育ちますし、そういうことが出来る先生が重要なと。

私は休まずに大学へ行こうと努力しています。この間、たまたま2週間程入院して休んでしまったんですが、そのあと学生から「先生休まないでください」と言われました。困ったなあと思ひまして。休まないで、と言われたら、もう休めないですよ。「2回休んだのは入院したせいで、仕方がない。ごめん!」と言いました。学生がそんなことを言うってくれるのは、ありがたいと思います。コミュニケーションができるからちゃんとしてくれるんだと思うんですよ。学生はダイレクトにものを言いますから。

山縣 休むと抗議が起こるとい話が出たところで、この座談会も10分間ほど休憩にしたいと思います。

〈コラボレーションをめぐる〉

山縣 さて、大きな問題となっているコラボレーション、それは相互性あるいは共生の問題でもあるかと思ひます。学科相互の問題、教官と学生の問題、また教官と事務の問題、それから学校と社会の問題もあり、様々な場面でこの問題は大きくなっていくでしょう。そういう点に焦点を絞って後半の話を進めたいと思ひます。どなたからでも結構ですのでどうぞお願いします。

イベント大好き



織作 先ほどテレビ・ドラマやレストランのお話がありましたが、そのようにイベント的なものから入っていくのも一つの方法かと思ひます。いきなり授業の中でクロスさせてもわけがわからなくなると思うのです。

自分たちで形を作っていくためのテーマを与えてあげると、何かできるのでは。例えば松井先生が作られたようなレストランであれば実社会で生きているわけですし、そういうものもいいと思ひます。けれどいきなりというのも難しいので、レストランのバックに実は芸大があったと、だけど表向きはレストランだったというような、後ろで押してあげる何かを大学側がやってあげるといいと思ひます。

後はイベント的な物ですよ。ドラマもそうですが、この前私が考えていたのは、映像学科と写真学科とが一緒になって町の立体物に作品を投影してそれに音楽をつける方法があります。そんなイベントをして市民たちを喜ばせてあげるとかもできますし。何か町ぐるみで何かできるんじゃないかと。そういったイベントから始めて、それが進んでいってそこからだんだん学科間が仲良くなって、繋がりができたところで授業の中にも反映するのが一番いいんじゃないかと思ひますね。いきなり授業でクロスさせてもなかなか難しいと思ひます。そんな機会（イベント）が年に1回か2回ぐらいあってもいいんじゃないかと思ひますね。キャラクター学科の学生が写真を撮るといのも、また違う感覚で撮れるのでそれを見ることも勉強になると思うし。もしかして写真学科に入ったのだけど、途中で映像学科のほうがいいかなと思ひたらこの大学では途中で学科を変えられるんですよ、みたいなものがあったらいいですね。今の段階ではそれはできるのですか？

理事長 できますよ。今、織作先生がおっしゃった内

容の部分ですけど一般教養で試みをしていますね。専門の科目を一般の教養にもおいてます。

52分の1から52分の多へ

事務局 学科間のコラボレーションなんですけれど。今、音楽教育学科、キャラクター造形学科など、音楽教育まで入れると14学科ありますけれど、よく入試広報なんかで14学科52コースありますよということで良くうりにしていましたけど。うちのうりは数がこれだけあるんだよという形で、52コースが52コースバラバラ。要するにコラボレーションしなければ1/52しか学べないみたいな、非常に狭いところで芸術を学ばないといけないような環境にあるという。やはりうちのうりというのは基本的に52あって、52の一つに行っただけ、いやあ3つ4つ5つは学べたよと。だから写真に入っても写真以外のプラスアルファを得た人間が写真学科を卒業するというような、やはりそういう各学科であることがこれからのうちの強みであろうと思うんですね。

だから設立当初のカリキュラムなんか見ると、いろんな事情があって、例えば設備とかが不十分なところがあったりとか、たくさん科目があってたくさん人を雇うといういろいろな人件費がかさむ問題があるかもしれないんですが、それがうまく具合にカリキュラムの中に組み込まれていて、その学科にいろんな学科の科目が入っているんですね。だから先程松井先生が言われたように、今でもグラフィックに所属していて写真とる科目がありますけれども、実際モノを創らせるというような状況ができたと思うんですよ。今はいろんな施設・設備が充実しすぎていてその結果各学科一つ一つがこじんまりなっているような形になってしまっているかもしれませんが、今の教務という立場からするともう一度、原点回帰することによって大阪芸大の良さがうちだせるんじゃないかなと考えております。今特定の科目の中には専門の科目を取れるようにはして

いますけれども、実習系においてもこれをこういう風にとってどうのこうのじゃなくて先生方が交流することによってそこに引きずられて学生が交わっていきけるような芸術空間になれば、とは思いますが。

理事長 イベントもいいですね。うちの大学はイベント大好きで。それおおいに参考にしてたくさんやっていきたいですね。

窪田 織作先生がおっしゃられたように、私は今、新聞社で事業に携わっておりますが、いろんなイベントを組み立てる中で、新聞社以外にたくさんの人や部署、企業がかかわってきます。イベントはそれだけ奥が深く、広がりがあるんです。だから大阪芸大も学内だけでなく地域や社会に、積極的に大阪芸大のイベントを仕掛けていったら良いと思います。例えば芸術フォーラム、芸術シンポジウムみたいなものや、大阪芸大らしく映画祭みたいなものをどんどん企画して、全国展開していけば、ゆくゆくは大学のイメージ、ブランド力がアップするでしょう。

逆に言えば大阪芸大はこういう大学で、素晴らしい先生がたくさんいるんだということがどんどん分かっていくと思うんですね。そうすれば地域や企業、団体の中に芸大のファンクラブができてきたりと思うんです。そういう応援団的な組織ができてきたり、そういう仕掛けをどんどん作っていったほうが私はいいんじゃないかと思いますね。特に先ほどから織作先生がおっしゃっているように、大阪芸大にはせっかくたくさん学科があるのだから、それを活用すべきだと思いますよ。一つの学科だけにとられると、縦割りの弊害というのが出てくると思います。やはり横の連携というのが必ず必要だと思うんですね。それを最大限に使っていろいろとイベントを軸にしてやっていったほうが良いと思います。特に地域とか学外でやるイベントについては一過性のものでなく、何年も何年も続けていけば定着して行って、それが更に大きくなると思いますね。やはり継続させていくということが一番大切だと思います。

先程大森先生がおっしゃられたように芸大も10年20年たって今のように大きくなったんで、10年以上やって初めて良いものができてくると思うんです。継続は力なりというように、やはり継続させていくということが大切ですね。学内もそうですが、学外でもそういうものを通じて大阪芸大の良さをもっともっとPRし、芸大ファンの輪を大きく、全国的に広げていけばいいと思います。

社会とのコラボレーション

大森 これからのコラボレーションを考える上で、先ほど織作先生が示唆された言葉に、「実社会とのかかわり」というものがあったんですけど、これがすごく重要だと思います。芸術家同士のコラボレーションというのは、これはこれで芸術的に一段高いところには行ったりするんで良いですけど、どっか芸術家同士の好きなものにはまってしまうところがあるんです。確かに日本での芸術に対しての注目というのは何かわからないところがあります。国が出してくる冊子とか見ていたら、芸術、芸術と言っているけれど何も芸術がわかってないなという文章がまわってくるんですね。

今こそ芸術大学と社会のコラボレーションを考えることが大事じゃないかと思うんです。戦後60年たって、こんなに芸術が大事だと、日本が思っている時期はないと思うんですね。ただ、なぜこれまで芸術がないがしろになってきたかと言うと、芸術家がいる、政治家がいる、それで医者、弁護士がいるという縦割りになっている。そこでは医者は芸術を何も知らなくていい、弁護士も政治家も芸術に詳しい関係なしという世界が、僕らの上の世代なんですね。しかし今はそうじゃなくて、芸術のわかる政治家、医者、弁護士、主婦、サラリーマンというのがすごく大事になってきているんです。芸術心はある程度誰でも持ってないとやっていけない社会になってきたときに、芸大がどのような人材を出していけるかということが、社会と芸術



とのコラボレーションじゃないかと思います。

芸術は時間のかかるものです。逆に言うと生涯教育みたいなのがあるところがあって、たまたま18歳から20代の間に芸大にいたということなんですけれど、その間に花開かなくても、ひょっとして定年退職して、60歳過ぎた時にむらむらっと4年間に教わったことが出てくるという可能性もあるので、長い目で見ないと。そういう意味では4年たって就職できない、芸術家になれなかったとって、そんなに嘆くことはなくて。これから先は出てくると思うんですよ、定年退職を迎えた芸大生が突然花開くということもあると思います。時間をかけて見ないといけないということです。またそれだけ社会の変化を見ていかないといけないということです。

最後に、ここに来て非常におもしろいと思ったことは先ほど僕の両親の世代が大和川の向こうに文化があるか、という話ですが、やっぱりあるんですね。大阪芸術大学というんですけど、大阪芸術大学のまん中に「の」を入れたらいいと思うんですよ。「大阪の芸術大学」というと非常におもしろいんです。学内に入って女の子が「あんた、この前の作品提出したん？」と大阪弁で芸術を語っているところに、すごくこの大阪芸術大学の新しい芸術の可能性を感じるところがあって。大阪という地域性をもっとアピールしていくというかな、そういうところでコラボレーションを考えていかれたらどうかと思います。

理論と制作のコラボレーション



山縣 依田先生どうでしょうか。

今まで大学と社会、学科間のコラボレーションの話が出ましたが、もう一つ私は芸大ということを考えてみたら、私自身が理論をやっているということもあるんですが、理論と制作との

コラボレーションという問題もあると思うんです。依田先生が初めに哲学のお話をされたときに、学生自身が哲学を持っているとおっしゃっていたのですが、そういう点からでも一言どうぞ。

依田 美学とか哲学というのは、とりわけ若い芸術家の方々からすればおせっかいのような感じがするんじゃないかと思っています。でも本当はそうではないんです。ぼくらのような仏教徒がこんなこと言うのもなんですが、キリスト教が今日あるのは、いうまでもないことですが、とりわけギリシア教父などが、ほとんどが磔になるなどの苦難の布教活動や、のちの神父さんや牧師さんの地道な布教活動等の成果ではあるのですが、いまなおキリスト教があんなに大きな勢力を保っているのは、やはり、プラトンや、アリストテレスや、プロティノス等の合理的で整合性ある哲学をソフトとして用いて理論的に武装した（キリスト教の肩をもっていえば、取り込んだ）からなんですね。それはやはり大きいと思います。ご存じのように、新約聖書そのものは、奇跡のオンパレードのようなものであり、ある意味ではしっちゃかめっちゃかなんですね。もちろんそのしっちゃかめっちゃかを信じることであれば、もうクリスチャンですよ。でも、もしあのままでしたら、当時のローマの宗教を信仰する優秀な知識人達や、のちのイスラム教の学者達が、ちょっとつっただけでぽろっと崩れてしまいます。今の大きな力は持てていなかったと思います。

それと同じで、芸術でも、しっちゃかめっちゃかでこんな芸術といえないじゃないかと嘲られたとき、いや芸術だと、胸を張って本当の意味でいえると思

ば、そして、本当の意味で長く続いたとすれば、やはり理論的に武装がなされていたからだと思います。ひとりよがりや、潤沢な資金や物量にものを言わせたり、単なる（扇動されたような）大衆の圧倒的支持だけでは、ある程度は続いても、真に長続きはしません。美学者や哲学者だけが理論的武装の仕事をやらなければならないというわけではありません。でも、理論家と芸術家の協力、理論と制作の関わり合いというのは、当然だと思います。非常にスケールの大きな視点でみればそのようにいえると思います。

山縣 私自身が理論のほうやっけていまして、個人的には理論と制作というのは相互的な関係にしなければならないと思っています。おそらくたとえば大森先生の作品を理論的に評価する人たちがいて、それがまた大森先生の支えにどこかでなっているでしょうし。今度は東京に行って織作先生の作品を見て考えたり、書いたりする、そういうことが相互の力になる、相互に何かを組み合わせることができると私は思います。そうした芸大のコラボレーションを考えると、さらにまた教官と事務局側との間にある種のコラボレーションが必要であると思うのですけれど、局長どうでしょう。

事務局と教官のコラボレーション

局長 さっき理論と制作とおっしゃいましたけど、教員と事務局、これはご存じの通り表裏一体。両輪だと言われ、まったくその通りだと思います。しかし、現状がどうであるかと言うと、教員側からすれば事務局というのは、ただただ補完的なのか、サポートするだけというのが事務職員という扱いが大勢を占めているような歴史があったわけですね。

ただこれから大学教育、特に高等教育を考える中で事務職員が単にサポート的な立場にいてではなくて、教員は教員としての役割があるのだろう、事務局員は事務局員の役割あるのだろうという自覚を事務局員が持っていないといけないと思いますね。

その主役は当然学生でありますから、学生に対して我々が、どのような形で先生方の役割以外のところを担っていくかということのをこれからも真剣に考えていかなければいけないと考えています。それが今おっしゃったようなコラボレーションに繋がるかどうかはわかりませんが、今とても重要なことと感じています。

山縣 塚本英邦先生、一番若手としてどうでしょう。

芸大グループ全体のコラボレーション

塚本英邦 これは理想なのですが、芸大や短大のキャンパス見学会、入学式・卒業式に行くと、通信教育部も含めて大阪芸術大学グループ全体でそういった混ざりあいがあったら面白いと思います。短大と芸大がミックスというか、コラボレーションですね。グループ校に行けば、学校によって先ほどの組織の文化みたいな物が違うんです。芸大は芸大の雰囲気があるし、美専も芸大と比べると構成している学生の種類が違い、雰囲気も違います。短大も違いますね。先ほどのイベントでコラボレーションという話しでしたが、芸大グループ全体でコラボレーションすると、例えば美専に来ている学生は社会の経験者が多いとかゆうのも、芸大の学生にすごい刺激になるだろうと思うし、短大生であれば2年3年で就職をみすえた学生がたくさんいますから、そういった部分で芸大生にも刺激があるだろうし、短大、美専だけに行っている学生も4年制大学っていうのはこうなのだと思うだろうし、私が想像する以上に学生たちは若い感性で刺激しあうのではないかと思います。できれば、本当に幼稚



園までは難しいかもしれませんが、芸大のグループ間や、芸大の学科間でコラボレーションをやっていけたらとても面白いのではないかと思いますね。

山縣 幼稚園とだって不可能じゃないでしょうね。幼稚園の園児や先生たちとも何かコラボレーションできるような柔軟な発想があれば面白いですね。

私は去年から局長や理事長に話をして大学院の授業として、松井先生と他の何人かの先生方と一緒にプロジェクト研究というのをしています。それは「カストリ雑誌の研究」というんですが、実際問題、僕はカストリ雑誌についてはまったくの素人だったんですね。この4月から松井先生や他の先生たちと一緒に何人かチームを組んでやっていると、新しくデザインなんかに興味を持ち始めまして、よし、それでは何か今までやってきたこととは違うことも少し勉強してみようかと思うわけなんです。そういう柔軟な発想といいますか、攻めの考え方ですよ。

確かに60年経ったことで我々は、この学校には守らないといけないものもたくさんあると思うんですよ。だけど単に守るだけではなく、守りが攻めになるような形を考えなければいけない、そうすればおもしろくなると思うんですよ。そのあたりは理事長、いかがでしょう。

新しいコラボレーションの可能性

理事長 おっしゃるとおりですね。それには仕掛人がいるわけです。今回、山縣先生なんかすごいと思うんですよ。こういうメンバーを、ランダムに選んだようできっちりそれなりの方を選んでいるんですよ。

山縣 それは局長なり新原さんに相談してでき上がったことなので、先ほどの、事務局側とのコラボレーションですが。

理事長 そういうプロデューサーが何人かおられると良いと思うんですよ。読売新聞などは、いろいろイベントやりましてね。うちも一緒に参加させられるん

ですよ。今度はルーブル展とか、ゴッホ展とかポスターとかチラシにうちの名前がちょっと書いてくれるんですが、これが高いんですよ（笑）。しかし例えばうちの学生がチケットとか見たときに「おっ芸大も協賛しているな！すごいな！」となるわけなんですよ。そういう話題のイベントもさることながら、でかいマスコミがやるようなイベントも参加しているんですよ。それも大事なことと思うんです。

山縣 山田先生いかかでしょう。

研究所の役割

山田 私は個人的なささやかな夢はほとんど実現していますからね。今のお話し聞いていて芸大に対しての夢が一つだけあるんですけど。どんなイベントをしても発展してもいいんですよ。ただし、今は小さいですけど、芸術研究所を世界的な芸術研究所にしたいなと思っているんですよ。というのは、日本で1番じゃないんですよ。日本でもあっちこちの大学にそれぞれ芸術研究をやっております。しかし、アメリカやヨーロッパ、中国からでも「やはり大阪芸術大学の芸術研究所へ行こうか」というところまでもって行って欲しいですね。そうしますと、今織作先生や大森先生がお話されたようなものをうまく結集できると思いますね。

なぜ、そんなことを考えるかと申しますと例えば大阪芸術大学と聞くと、大森先生がおっしゃったように田舎にあるという感じがしますね。昔の大阪に住んでいる者は、理論化がへたなんですね。こういう経験が一つあるのですけれど、昭和30年頃に梅田画廊で絵を見てましたら、ある人が大きな鞆を持って来て「梅原龍三郎は今なんぼしてんねん？」と言ってぱっとお金出すわけなんですよ。だから流通の問題だけなんですよ。梅原龍三郎の絵というものがほとんど分かっていないんです。そういうところが大阪にはちょっとあって、つまり流通、あるいは貿易、そういうものが中

心の社会ですから、観念で作品を見ているところがあります。それを突破するためには芸術研究所という形で深めていき、同時にコラボレーションを進めていく。そういうような方向が一番良いんじゃないかと思いません。

山縣 確かに大学の中のコラボレーションの中核としては研究所が非常に大きな役割をはたさなければいけないと思っておりますが。僕は1年の辞令をもらっていますから、1年間だけがんばろうとやっています。京大に人文科学研究所というのがありますね。あれは戦後に桑原武夫さんが所長なさっていて、人文科学では大きな仕事をなさってきたわけですが、芸大の芸術研究所は、理論と制作の両方をコラボレートするという形で今後大きくなっていけばいいかなと思います。

山田 人文科学研究所みたいに大きくなくても良いと思うんです。人文科学研究所より小さな組織でも非常に良いところがあるんですよ。芸術研究に限っては、人文科学研究所の上に行くようなものにすれば。つまり世界がぱっと見る。そこまでいくと、他はどんなに拡散してもかまわない。そんな感じがしますね。

「大阪芸術大学賞」への夢

依田 その続きになるかどうかわかりませんが、大阪芸術大学の単独か、企業と一緒にということになるかはわからないですが、国際芸術賞みたいなものを創設できたら非常に素晴らしいことになると思います。京都に、ノーベル賞に比肩しうる業績をあげた人を対象にした世界的な賞として、「京都賞」（京セラの創設者稲盛氏の稲盛財団が運営）というのがあります。この三つの部門の一つに芸術部門というのがあります。京都の芸術系諸大学はやはりこれと同じスケールの国際芸術賞は創設しにくいように思います。大阪芸術大学は、大阪でするので、その点実現しやすいように思います。

松井 今朝オフィスに、たまたま京都賞に誰か推薦し

てください、というのが、私のところに届いていて、そのことは知っています。それは置いておいて。おっしゃる賞というのは非常に重要なと思います。我々のデザイン業界だけなのですが、コロラド大学が世界の著名デザイナーを指名しまして、作品を集めて展覧会を催し、それをコンペにしているんですね。それを2年おきにやっていて、だんだん世界的に有名になってしまった。コロラド大学というのが、我々の世界では誰でも知るようになりました。

私も今まで5回、10年間ぐらい指名されて出しているんですけど、大学側は完全に無料でコレクションにしているんですよね。そんなことは大阪芸大で、できないことはないんじゃないかと思いますね。それで、いわゆるグラフィックだけじゃなくて、アートから映画まで、例えば大阪芸術大学賞みたいなものを創ってやるというのも一つ方法論として世界でアピールできると思います。それもこちら側から指名して行うのです。そうするとこっちが思ったとおり、いい人が呼べるんですね。

理事長 それ良いですね。考えましょうよ。

織作 兵庫県の小さな町の朝来（現・朝来市）というところが、写真館を建てて下さったんです。明治時代の建物を移築してくれたんですが、鉱山の町で、フランスの鉱山大学から来た設計士のムーセさん一家が住んでいた家をそのまま写真館にしてくださったのです。その町が彫刻展を毎年開いていて、コンペで賞金が1千万円です。ただしその中には制作費も入っていて、1千万の賞金の中でその町で彫刻を創っていくというイベントがあって、私も審査員をやっています。事情があって、賞金は300万円になってしまったんですが、毎回すごくいい作品が集まっています。そこも毎年作品を残してもらうことが条件でしたが、そういうことってできるんじゃないでしょうか。

理事長 指名した作家の人の作品がダメだったら（賞金は）ゼロなんですか？

松井 こちらが人を指名するので、悪い作品は集まら

ないと思いますが、例えば、1位がその時なければ、それは出さないですね。我々の世界でいうと国際コンペが世界で何ヵ所かあるんですね。大学でやっているのが世界でもコロラド州立大学だけなんです。後はチェコのブルノだとか、フィンランドのラハティだとか、モスクワだとか、メキシコシティだとかっていう風に数も少ないです。展覧会を各都市の美術館で3ヵ月間、あるいは半年と意外に長い時間催しています。去年も私はブルノに国際審査員として招待され行ってきました。ブルノというのは、我々の世界の中で一番長い歴史のあるコンペティションなんです。ブルノ・インターナショナル・グラフィックデザイン・ビエンナーレというんですけれど。そこは市も援助しているんですね。お金が市から出て、国からも出て、団体や企業からも出るんですね。市内にある3つの美術館を使用し、街のギャラリーも沢山参加して催されている。ブルノ市全体を使った「デザイン祭り」となっています。

コンペティションというのは非常に知名度が上がる確立が高い。確かに我々の世界というのは見せることが本当に少なかったじゃないですか。グラフィックデザインの展覧会を美術館でやることはあっても、デパートでやるといってもデパート側が敬遠して、なかなか難しいですよね。アートや写真だったらできるんですね。そうじゃなくってグラフィックデザインを見せるということを市が完全に援助しているんですね。そういう意味ではやり続けると必ずやいつか知ってくれるし、みんながこっちを向いてくれるということがあるので、是非僕は提案したいですね。

依田 指名されているということですので、アメリカの映画のアカデミー賞でいったら、ノミネートされているような感じですね。指名されるということは、もうそれだけで名誉なことなんですね。

松井 そうですね。こんなことで世界と交流できたら面白いですね。また少し話が変りますけれども、去年やらせていただきました日本グラフィックデザイナー



協会（JAGDA）主催で、著名デザイナー18名で一日だけの講義。題して「JAGDAワンデースクール」を大阪芸大で行いました。今年も是非やらせていただきたいのですが。去年開催したところ、関西では大阪芸大でやると決まったら京都や神戸の大学の学生や若手デザイナーたちが来させて欲しいと言うのですよ。大阪芸大でやることになったから、もう他でやりにくいと思います。このJAGDAには全国で2200名ぐらい会員がいるんですね。その中には東京ADCの会員が含まれています。この「東京ADC」とは「東京アートディレクターズクラブ」という、日本の著名デザイナー85名というサロンのようなクラブです。東京在住以外では私だけが会員で、この「東京ADC」の会員の多くがJAGDAの会員でもありますので、私が声をかけると今を時めく売れっ子デザイナーが、友達感覚で来てくれるんですね。こんなイベントを立ち上げるとよそがもうできなくなるので、非常に形としては良いかなと。

山縣 早いもの勝ちですね。

松井 大阪市内でやればもっと大勢来ますけど、わざわざ近鉄に乗って来てくれるんですね。しかも京都や神戸の学生や若いデザイナーがかなり来たんですよ。

山縣 大和川の南の新しい芸術センターですか（笑）。

松井 そう、新しい芸術センターで新しい企画を付加する。基調講演で大森先生に話をしてもらおうとか。この「JAGDAワンデースクール」はデザインを学ぶ学生の参加が多いのですが、イベントも含めながら行えば他学科の学生も喜ぶと思いますね。去年も盛況で500名以上が入りましたし、良いイベントをやれば良い結果が出ると思いますね。

さまざまな夢・その実現に向けて

理事長 いろいろな夢が出てきているんですが。窪田さん、卒業生として、あるいは今社会で仕事なさっている方として、こういう夢もあるんじゃないかと、何かありませんか。

窪田 大学そのものとしては、地域と密着したイベントを含めたコラボレーションや、先ほどの松井先生のお話にあった賞も確かに良いことだと思います。毎年が厳しいようだったら、ピエンナーレでもトリエンナーレでも、やり方があり、逆にその方がいいんじゃないかと思えますね。2年、3年間あたためて調整していく方式で。その賞が一過性のものでなく、ずっと続けていって、それが何年かたって定着して、逆に大阪芸大の賞がいろんな意味で各芸術分野や各界の登竜門になるぐらいになればしめたものだと思います。

最初に話したように、芸術の領域はこれからさらに幅が広がると思うんです。先程も松井先生から和紙作りのために精華へ行くというお話がありました。これは可能性があるかどうかは分からないんですが、日本の伝統芸術を芸術ととらえ、伝統を守り育てて発展させていく。また、若い人にマッチするような伝統芸術を育てていく。なかなか難しいと思うんですが。お茶、お花、それから歌舞伎の世界など、伝統の世界は幅広いと思うんです。例えば書の世界に挑戦して行って、新しい書の学科や専攻をつくれれば面白いんじゃないかと思うのですが。書道人口、書道芸術というのはすごく裾野が広いので。漢字文化圏は日本と中国しかないわけですから、伝統という部分も守り育てて、今の時代に合った形で発展させるような学科なりコースが、もっとできてもいいんじゃないか。それから、これは大学の運営などにかかわってくると思うんですが、社会が今何を求めているのか、これから先の社会がどのようなになるのかということを経長いスパンでとらえること。例えば「これが当たっているから、これをやれば学生が来るかな」と飛びつくと、そのときはいい

けれど先はどうなるかわからない。そうじゃなくて、今後10年、20年先はこれが必要だというものを見定めてほしいと思います。

大阪芸大が60年間やってきて、これからもそういうように発展させていただければ、卒業生として鼻高々でやっていけると思います。それから、我々が通っていたとき以上に、すごい先生方がおられるという理事長のお話でしたが、それは素晴らしいことだと思います。我々が入った頃、まだ放送学科ができて3年目ののに放送局のスタジオのような施設と機材、設備がすでにあった。そういう大学は他にないと思うんですよ。だいたいソフトがずっと先行し、知識だけの勉強をして、社会に巣立っていく。そういう人は社会の現場に出てから苦労すると思うんです。ところが大阪芸大の場合は、とにかくハードを造ってしまう。先程、大森先生がおっしゃったように撮影所があったり、今度はオペラハウスなどいろんな施設ができて、これは素晴らしく恵まれていると思うんです。やっぱり現場や、実技を体験した人間が社会に出ると実践力になりますよ。そういうところをもっともっとPRしていくべきではないでしょうか。例えば外部の人に何かの機会に芸大の施設を体験してもらおう。素晴らしい放送施設があるんだったら、そのテレビカメラや中継車を使って、外へ出掛けていっているいろいろ行くとか。「攻撃は最大の防御だ」と言うように、もっと攻めの姿勢でいってもらえればいいと思います。

山縣 守りが攻めになるような形というのは、それは一番いいことです。理事長、そろそろ締めでしょうか？

理事長 今日は本当にたくさん、実現しそうな良い話がたくさん出てきました。我々教職員全員に、それぞれ役割があるわけで、何を行動規範にするかですね。この行為は学生のためになるのか、ならないのか。これがまず規範です。それをついつい忘れがちですので。いつも職員の中ではよく言っているのですが、立派な先生を目の前にするとなかなか言いにくいのですが

(笑)。

山縣 塚本英邦先生はいかがですか。夢として、「さまざまなグループが相互的に」というふうにおっしゃっていて、僕も可能ならそういう形があればおもしろいと思いますが。

塚本英邦 僕も皆さんのお話を伺い、イベントから始めて授業へいったらいいのか、もしくは自然に時間をかけた方がいいのか、考えていました。

あと、次の時代についてですが、高齢化社会を迎え、人口ピラミッドを見ていると、どんどん年齢が上がっていています。高齢化社会の次の時代のピラミッドをどうなのか。このままでいくと若者はもちろん、人口そのものが減る一方というところですが、人口が減ったときの大学の役割もまた変わってくるんじゃないかという気がします。

山縣 次世代にとっては、心配の種ですよ(笑)。それについては、先程、大森先生がおっしゃったことと、最近新聞で読んだこととがリンクして、面白いことが考えられます。大森先生は芸大で学んで、60歳を過ぎてから作家になってもいいんじゃないかというお話でしたね。それと絡んだ形で言えば、60歳を過ぎてから芸大に来て学んでもいいんじゃないか、とも考えられます。「いろいろ金儲け仕事をやってきたけれど、よし、一度映画を撮る勉強をしてみようか」とか。あるいは絵を描いてみよう、小説を書いてみようかというようにね。「カルチャー教室でもいろいろ開講してはいるが、そうではなく芸大へ」というように。その場合、あそこへ行ってみようという魅力を持っていない。「カルチャー教室でいいだろう」となってしまうといけないう気がします。確か、60歳を過ぎてから、小椋佳が東大に行ったのでしたか(50歳で銀行退社、東大文学部に学士入学)、また、内館牧子が東北大学ですか。さまざまな形で勉強をし直そうという人がいるわけですから、定年を迎える団塊の世代の人たちの中から芸術をやるという人もきっと出てくると思うのです。だから、少子化はそんなに絶望だけではありません。



織作 去年の卒業生で、賞をとった方があります。とてもユニークなのですが、同年代の女性のポートレートを撮っているんです。すごく不思議な雰囲気です。彼女はもちろん、いつも学校に来ていて、卒業作品の制作としてそれを出してみましようということに。すごいことだと思うんですよ。こういう方もいらっしゃるということを宣伝の一環として紹介してもいいんじゃないでしょうか。エクステンションもあるのですよね。自分の文化的な可能性を活かして社会に役立てたいなという人が多いと思うんです。

大森 夢のお話についてですがね、夢といいますのは、かなわぬが花でして、無いから夢を語るんですよ。

何を申し上げたいかと言いますと、撮影所というのを持っているというのは夢がかなっているんですよ。日本でも撮影所が欲しくて映画会社を買収するという話があります。インドに行ったら、大富豪が家に撮影所を持っているんですね。これが夢だったと言っていたんですけど。撮影所自体が夢工場と言われているので。それを既に持っているということはもう夢がかなっているということなんですね。これはこれで困ったものだと思うんですけど（笑）。学生はあって当たり前だと思ってしまって、ありがたみがないのでは、と思ったりします。

だから夢の次のことを考えなければいけないんじゃないかと。それは何かと言うと、芸術というのは何を教えるかというリスペクト、尊敬ですね。尊敬を教えることが芸術を教えることだと思うんですよ。僕でいうと過去の作品であるとか、監督とか、カメラマンとか。しかし、リスペクトを教えるのがこれほど難し

い時代はないと思うんですよ。それは映画なんか誰でもできる時代になっちゃったんですよ。昔は映っているだけでござって言うていた時代だったのが、今はDVカメラで撮って映っていて当たり前という感じで、すぐにパソコンで編集できる。映画もどきなものがいっぱいできてきて、それが僕らのいう映画じゃないということ教える大変さですよ。

夢の次は心の問題になっていくんじゃないかという感じですね。難しいですね。

山田 大森先生のお話の中で非常に大事なところがありまして、結局リスペクトを生み出すためには、例えばフィルムセンターがね、東京にはあります。芸大に造る必要があります。八月には中島監督の作品についてのシンポジウムをやるんですが、京都文化博物館にもストックがない。規模は小さくても良い作品、フィルム、映画に関しても絶えず集めて観せるということをやるのが大切ですね。でも、小津を講義していても、学生で一回も観たことがない人がいるんですよ。こっちも目の前で小津安二郎の作品が観られますので、新しい発見があります。そういう意味では絶えずビデオの良いもの、フィルムの良いものがないといけませんね。センターがないとね。センターがあっても絶えず使える状態じゃないとだめですね。

理事長 先生、あれはみんなで観るのが良いのですか、それとも一人の方が良いのですか？

山田 それはね、映画というものは面白いもので、たくさん集まると観るのもいいけれど、たまに5、6人で観るのもいい。どちらでもいいんですよ。

理事長 世間で先駆けてうちでは個人で観られる仕組みがありましてね。それは一人で図書館の施設で観るわけなんですけれど、会場があってにぎやかな方がいいのかどうか。

大森 結局一人だと観に行きにくいというだけだと思いますよ。基本的に一人で観ても、大勢で観ても映像は一緒だと思いますよ。

山縣 ただ一人で観る場合は本人のモチベーションが

いると思うのですね。立て看板があって映画をやりま
すよといった方が、ある程度受け身でもみられるん
じゃないですか。看板そのものがモチベーションにな
りますから。

依田 学生時代に観た外国映画で、頂上が広く平らな
岩山の頂上の少し下をすでに頂上を飛び立って逃げて
行く悪玉の乗った小型のプロペラ機（セスナ機）が見
えています。そこへあとから追いかけてきた善玉ヒー
ローが、勢いを付けてオートバイに乗ったままで頂上
から飛び降りて、オートバイごと遙か眼下の小型機の、
ドアが開いている操縦席に飛び込む場面がありました。
ぼくはすごいと喜び、涙目になり感動しつつも、思わ
ず、「そんなあほなー」と叫びました。すると、多数の
観衆の内、少なく見積っても、10人は下らぬ観衆がほ
ぼ同時に「そんなあほなー」と叫んでいました。みん
なで観るのも楽しいですね。ですから、entertainment
という英語は、entretenirというフランス語の動詞からき
ていますから、entre（二つの間）を+tenir（よい状態に
保つ）ということですから、entertainmentのenter（二つ
の間）は、主として、主・客即ち映画スクリーンや舞
台と、観衆との間を意味しているのですが、ひょ
っとすると、出演者同士や観衆同士の間でも使えるか
も知れませんね。

理事長 トラさんの最初の頃なんかトラさんが出て来
ただけで、どーんと観衆が湧きあがっていましたよね。

山縣 学生さんの好奇心を旺盛にするというかモチベ
ーションづくりも大切ですよ。松井先生なんか、先
生の周りに、松井軍団がいるんですよ。松井先生の
ファンの会みたいなのがあるんですよ。

織作 松井先生の最初のお話に「誉めてあげる」とい
うのがあったのですが全く同感です。自分が必要と感
じるが生きている証になると思うんですね。

依田 最後の話題になろうかと思いますが、少し不思議
な縁の話をしたと思います。山縣先生からさきほ
ど、理事長がちょうど60歳になられたという話があり
ましたが、なぜ話題に上るかという、いうまでもな

く、塚本学院の創立の年月日と理事長の生年月日が同
じであるからです。365日、当時の地球上の同一の生年
月日の人数、地域、勤務先数等々の多数の項目を念頭
に計算しますと、分母が途方もなく大きくなるきわめ
て小さい確率です。そこに不思議な縁を感じざるをえ
ません。

不思議な縁といえば、もう一つあるんです。それは、
学院創設が、初代理事長学長塚本英世先生が1945年10
月15日に、平野英学塾を、大阪の平野の大念仏寺の宿
坊を借りて創設されたことに始まりますが、この「平
野の大念仏寺」と、大阪芸術大学が、大阪芸術大学グ
ループの中心として今日大発展していることが不思議
な縁で結びついているということなんです。つまり
「平野の大念仏寺」と「芸術」との縁のことなんです。

そのことをちょっと説明させていただきます。そも
そも平野の大念仏寺といえますのは、わが国最初の念
仏宗である融通念仏宗の大本山です。この融通念仏は
大念仏とも言うんですが、この教えの創始者は、良忍
です。西暦1073年生まれで、1132年に亡くなりました。
良忍上人または聖応大師と敬って呼ばれています。い
うまでもないことですが、彼は卓越した僧でありまし
て、実際、彼の教えは、46歳のとき大原で念仏三昧中
に、阿弥陀仏が立ち現れ、速疾簡捷な往生の方法を
「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、
是名他力往生。十界一念、融通念仏、億百万遍、功德
円満。」として彼に示した偈がもともになっています。

実はですね、良忍は、人生の大半を京都大原に隠棲
して過ごしましたが、一時期、京の都や、全国に融通
念仏遊説の旅に出ましたが、そのとき立ち寄ったのが、
大念仏寺（古名修楽寺）です。立ち寄った理由は、聖
徳太子と関係があるんです。つまりですね、良忍は聖
徳太子をことのほか尊崇してしまっていて、わが大阪芸術
大学のキャンパスの中にあるとうっかり思いそうなほ
ど近くに聖徳太子の御陵のある叡福寺がありますけれ
ども、ここにちゃんと詣でているんです。ところが彼
の聖徳太子崇敬は半端じゃないんですよ。つまりです



ね彼は、大原で61歳でなくなり、大原の来迎寺に葬られたのですが、彼は聖徳太子の御陵のある叡福寺に詣でただけでなく、遺言で、死後の自分の骨を分骨して、叡福寺に埋葬させたほどなんです。もちろん聖徳太子縁の四天王寺にも詣でています。このときに当時の平野の修楽寺（のちの大念仏寺）にはいり、多くの人々を導き、この寺を根本道場と定めたというところから融通念仏宗の大本山になったというわけです。立ち寄った理由が聖徳太子で、もしかしたら大阪芸術大学のキャンパスのあるあたりを歩いていたかも知れないと考えてみると不思議でしょう。でも、これから話をする「大念仏寺」と「芸術」の不思議な縁をお聞きになったらもっと不思議に感じられますよ。

今お話いたしました熱情的に布教する宗教人としての同じこの良忍は、日本の音楽の原点とも言われる、仏会で仏の徳をたたえて経文に曲節を付して唱える声明（しょうみょう）の達人でもあるんです。よほどの美声であつたらしくてですねえ、生まれたときの第一声あまり美しかったので音徳丸という幼名をつけられたとか、今も京都大原に音無しの滝というのがあるんですが、どうやら良忍の美しい声明に、滝が共鳴してその音を止めたので、そんな滝の名になったとかいような伝説が残っているほどなんです。とにかく音楽芸術と密接に関わりがあるんです。

ところがですよ、この良忍の開いた融通念仏宗は、「融通念仏縁起」と呼ばれる大量の「絵巻」をいわばメディアとしてこれを布教活動に用いて勢力を一気に拡大していったのです。この絵巻には、仏前で勸進聖とよばれる指導僧の立会いのもと、あらゆる階層の信者

が色とりどりの衣服を身にまとして躍っている、躍動的で、熱狂的で、写実的な様子が描かれています。登場人物の顔の表情も、豊かで、アニメに出てくるようなものもあります。とにかくすごいんです。見事な芸術作品であり、それは、まるでですね、舞台芸術や、映画芸術で表現される世界のように生き活きと描かれた絵画と文章からなっていますから、もう総合芸術といってもいいですねえ。

もう皆さんお分かりだと思いますが、塚本学院発祥の地「大念仏寺」と「芸術」の結びつき、縁・・・実に不思議です。そう思われませんか。

山縣 今日はお忙しい中ありがとうございました。私自身正直申し上げますと、ここで以前から親しく口を利いていただいているのは山田先生と松井先生、それに依田先生だけで、大森先生はときどき学内でお見かけするだけで、織作先生はお目にかかるのも今日が初めてでした。学科を超えてのコラボレーションはまずここから始めることにしようという気もしますが、何かの縁でここでご一緒したわけですから、大阪芸大がより良く発展していくために、また何か機会がありましたら、ご一緒させていただきたいと思います。諸先生方、理事長、それに事務局側の皆さん、今日はどうも本当にありがとうございました。

大阪芸術大学のあゆみ

- 昭和20年(1945) 初代理事長・学長故塚本英世により、平野英学塾創設。
- 昭和21年(1946) 財団法人浪速外国語学校(3年制)を創立。平野英学塾を発展的解消。
- 昭和26年(1951) 浪速外国語短期大学(英語科第一部)開学。
学校法人浪速外国語学院設立。
- 昭和32年(1957) 大阪美術学校(各種学校)美章園学舎設置。
- 昭和34年(1959) 大阪市東住吉区矢田に本部を移転。
- 昭和39年(1964) 浪速芸術大学芸術学部美術学科・デザイン学科を設置。
- 昭和41年(1966) 学校法人浪速外国語学院を学校法人塚本学院に改称。浪速芸術大学を大阪芸術大学に改称。
- 昭和42年(1967) 大阪芸術大学芸術学部建築学科・文芸学科を増設。
- 昭和43年(1968) 大阪芸術大学芸術学部音楽学科・放送学科を増設。
- 昭和45年(1970) 大阪芸術大学芸術学部写真学科・工芸学科を増設。大阪芸術センターを設置。
- 昭和46年(1971) 大阪芸術大学芸術学部環境計画学科・音楽教育学科・演奏学科・映像計画学科を増設。
- 昭和47年(1972) 大阪芸術大学附属の大阪音楽専門学校(各種学校)を設置。
米国A・I・C・A・D加盟校との夏期特別セミナー(第1回)開講。
以後、毎年本学およびカリフォルニア美術工芸大学(C・C・A・C)等を会場として交互に開講。
第1回日韓3大学デザイン美術交流展開催。以後、大阪およびソウルを会場として開催。
- 昭和48年(1973) 大阪芸術大学芸術専攻科(美術・デザイン・建築・文芸・音楽各専攻)を増設。
- 昭和49年(1974) 大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科・芸術計画学科を増設。
- 昭和50年(1975) 学院創立30周年記念式典を挙げる。
- 昭和53年(1978) 大阪芸術大学芸術専攻科(写真・工芸・音楽教育・演奏各専攻)を増設。
- 昭和56年(1981) 大阪音楽専門学校(各種学校)を大阪芸術大学附属大阪音楽学校(各種学校)に改称。
大阪美術学校(各種学校)を大阪芸術大学附属大阪美術専門学校(専修学校)として設置。
塚本英世記念館／芸術情報センターを設置。
- 昭和60年(1985) 学院創立40周年記念式典を挙げる。塚本学院大阪芸術大学御岳高原研修センターを設置。
- 昭和62年(1987) 第1回日中作品交流展を上海で開催。以後、隔年に大阪と上海で開催。
大阪芸術大学附属大阪音楽学校を廃止。学校法人塚本学院白浜研修センターを設置。
- 平成3年(1991) 大阪芸術大学の入学定員変更。
(芸術学部・美術・デザイン、建築、文芸、音楽、放送、写真、工芸、映像、環境計画、音楽教育、演奏、舞台芸術、芸術計画の各学科。終期平成12年(2000)3月31日)
- 平成4年(1992) 学校法人塚本学院管平高原研修センターを設置。
- 平成5年(1993) 大阪芸術大学大学院芸術文化研究科芸術文化学専攻(修士課程)を設置。
- 平成7年(1995) 学院創立50周年記念式典を挙げる。
大阪芸術大学大学院芸術文化研究科芸術文化学専攻(修士課程)を設置。
- 平成9年(1997) 大阪芸術大学大学院芸術制作研究科芸術制作専攻(修士課程)を設置。
- 平成13年(2001) 大阪芸術大学通信教育部を設置。
- 平成14年(2002) 大阪芸術大学博物館を開設。
- 平成15年(2003) 大阪芸術大学芸術学部環境計画学科を環境デザイン学科に改称。
- 平成17年(2005) 大阪芸術大学大学院の芸術文化研究科と芸術制作研究科を芸術研究科博士課程[前期・後期]に改組。
大阪芸術大学芸術学部キャラクター造形学科を増設。